福音 №296 2013年1月

神を神として・祝福の道を

この年も、
神を神として
生きていこう。

朝、
まず聖書を開き、
み言葉に聴き入ろう、
神を神として生きるために。

その日が、どのような一日であれ、
誰かを愛するチャンスを
見逃さないようにしよう、
主イエスに従い行くために。

自分の心が怠惰になり、
喜びも感謝も消えてしまったら、
「ごめんなさい」とお詫びして、
すぐにも十字架のみ前にひざまずこう、
聖霊を受け、
新しい力をいただくために。

この年もまた、

神を神とするその一点に

立ち帰り、

立ち帰り、立ち帰り、生きていこう。

☆　祝福を受け継ぐために　☆

これからどうすればいいのか、どう生きれば良いのか分からない時、人は思い悩む。どんなに思い悩んでも、明日の見えない人間には何が最善なのか分からない。そんな中でどのような時も、家族がいる時も、一人になっても、元気な時も、病気になっても、それらの境遇や状況を超えて最善に生きる道があると教えてくれたのも聖書だった。

聖書を読み始めた頃、「どうすればいいの」と心に迷いが生じる度に思い起こしたのは、ミカ書 6 章 8 節の御言葉だった。

主のあなたに求められることは、

ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、

へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。

そうか、それでいいのだと暗唱するたびに平安を得た。新共同訳ではもっとわかりやすい。

人よ、何が善であり

主が何をお前に求めておられるかは

お前に告げられている。

正義を行い、慈しみを愛し

へりくだって神と共に歩むこと、これである。

若き日にも、年を取っても、死ぬ間際にも、「へりくだって神と共に歩む」に勝る善きことのあるはずはなく、神様が共にいてくださるならいついかなる時もそれが最善と、この御言葉に支えられてきた。

それからも、神様に立ち帰るための御言葉は、その都度与えられてきたけれど、今年、２０１３年、お正月だけは揃って帰省する子供たちもそれぞれの持ち場に帰って行って４日、さあ、これからが私の新年と心を新たに主を仰ぎ、求めた。

イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。

そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、

わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。1 ヨハネの手紙 3:16

即座に「それは無理です、この私にはできません」と言って、「それではお前には何ができるのか」と問われた思いがして我に返り、この御言葉は、私よりも私をよく知っていてくださるイエス様に従い行くことなのだと気がついた。生きるべき時には生かしてくださるであろう、死ぬべき時には死なせてくださるであろう。思い煩ったとて寿命を一日も延ばすことのできない者が、できるもできないもあったものでない。自分の傲慢と愚かさに気づかされ、それでも今年の目標にと、何度読んでも「これだ！」と、紙に書いて貼ってしまう「新祈願」という内村鑑三の祈りの言葉を、また新たに書いて机の横に貼った。

何人に対しても悪意を懐くことなく、

万人に対して好意を表し、

総ての機会を利用して善を為し、

我が残余（のこり）の生涯をして

祝福の連続たらしめんと欲す、

神よ願わくば我がこの祈願を助けよ。

１９０１年１月「聖書の研究」

心に悪意があるなら、神様はその人を祝福することがおできにならない。好意や善意には祝福が雨のように降り注ぎ、心はますます明るく喜ばしくなり、その喜びは回りの人にまで伝わっていく。

ほんとうに

自分の心に

いつも大きな花をもっていたいものだ

その花は他人を憎まなければ蝕まれはしない

他人を憎めば自ずとそこだけ腐えれてゆく

この花を抱いて皆ねむりにつこう。

八木重吉「明日」の最後の部分

大きな花とは、人の心に咲く神様の祝福の花。どんな美しい花も憎しみや悪意によって蝕まれ腐れていく。「何人に対しても悪意を懐くことなく、万人に対して好意を表し」」心に愛の花を咲かせて、この新しい年も祝福の道を歩んでいこう。

終わりに、皆心を一つに、同情し合い、兄弟を愛し、

憐れみ深く、謙虚になりなさい。悪をもって悪に、

侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって

祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐために

あなたがたは召されたのです。(1 ﾍﾟﾃﾛ 3:8･9)